

保育実習 I を通して得た学生の学びに関する考察
— 学生が実感できる学びとその過程 —

川原 亜津美*

A study of students' learning through Teaching Practice I at nursery schools
～ students' learning they can realize and the process ～

要約

本研究は、保育実習 I を経験した学生が実感できる学びを明らかにし、さらに学びの実感に至るまでの過程を明らかにすることを目的とする。実習振り返りシートを整理分析した結果、保育技術の修得、特に「子どもへの言葉かけ」と「子ども同士のトラブルへの対応」が実感できる学びであることが明らかとなった。逆に「保育所の理解」「家庭・地域との連携」は学びとして実感できにくいものであることがわかった。

さらに、実習日誌を調査した結果、学びの実感に至るには共通した過程があることが明らかとなった。まず学生自身が戸惑いや葛藤というネガティブな感情を一度抱き、それを改善するための具体的な方法を知りたいと強く意識し、そしてそれを実践し成功体験を得るという過程が共通してみられた。このような体験と感情の過程を経ることにより、学びの実感につながるということが明らかとなった。

キーワード：保育実習、学び、実習振り返りシート、実習日誌

(Abstract)

This paper reports on what students can realize their learning through Teaching Practice I, and the process for this. After examining students' 'Teaching Practice Reflection Sheets,' it was found that what students were able to realize their learning was 'learning of nurture techniques,' particularly 'how to speak to and communicate with children' and 'how to deal with trouble among children.' On the other hand, students were not able to realize 'how to understand children' and 'cooperation with children's family and community.'

After examining their teaching practice records, it was found that students were able to realize their learning through the following processes: students experienced negative feeling like confusion and conflict, then eagerly tried to find means to solve those problems, and finally, they attempted to put these into practice with successful results. It was evident that, through these processes of experience and feeling, students were able to realize their learning.

Key words: teaching practice at nursery schools, learning, teaching practice reflection sheets, teaching practice records

*受理年月日 2016 年 9 月 29 日、高松大学発達科学部助教

1. はじめに

保育士資格取得を目指す養成校の学生にとって、保育実習は大きな経験である。実際の保育現場で、子どもや保育者と対面し、保育を体験することにより、実践につながる知識・技能を大いに学ぶこととなるだろう。保育実習実施基準〔1〕においても「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」とある。実習担当教員は、この目的を学生自身がより良く達成できるような実習事前・事後指導を目指している。実習事後指導について述べると、実習での経験を整理し、学生自身に学びを認識させることが求められる。『保育実習指導のミニマムスタンダード』〔2〕においても、「実習内容を確認させる」ことが大項目として提示され、「実習の具体的な内容を学生に報告させる」「課題の達成状況について報告させる」「実習中に印象に残ったできごと・体験を整理させる」ことが掲げられている。このように、実習後の振り返りをおこない、学生自身が学びや成長を実感し、認識することが重要視されている。

ところで、保育実習を通して得た学生の学び・成長を明らかにするため、これまでに多くの研究がなされている。三木・桜井〔3〕は15項目からなる保育者効力感尺度を作成することにより、実習を経験することが自己効力感にどのような影響を及ぼすのかについて明らかにしている。小藺江〔4〕〔5〕は、保育実習に焦点をあてた保育実習自己効力感尺度を作成している。そしてそれを用いて、実習を重ねる学生の、保育実習における自己効力感の変化についても明らかにしている。

また山瀬〔6〕は保育実習Ⅰを終えた学生の学びを8つの観点に分けて整理している。8つの観点は『保育実習指導のミニマムスタンダード』〔2〕に示された保育実習Ⅰにおける授業内容を参考に作成されており、これらについて、「できたこと」「もっと学びたいこと」に分け、自由記述によって、振り返りをおこなっている。その記述から学生が習得したと認識した専門性について明らかにしている。

これらの先行研究における質問紙調査においては、実習を通して得た学生の多面的な学びを整理し、明確にすることができている。学生への質問項目は多様で、その質問に回答するなかで、学生が学びをあらためて実感することにもなっているだろう。

しかし、多面的な学生の学びのなかには、学びとして実感できるものと、身につけてはいても学びとして実感できにくいものがあるのではないだろうか。つまり実習を通して学んだこととして、学生自身がすぐに想起する学びと質問項目として問われたからこそ想起できる学びがあるのではないか、ということである。

そこで本研究は、学生が学んだと実感できる学びと、できにくい学びを明らかにすることを目的とする。学生自身が学んだと実感できる項目、できにくい項目を把握することは、実習事前指導・事後指導にも大いに役立てられるはずである。また、学生が学びとして実感できる背景には、自分に身についたと実感するに至る過程があるはずである。学びとして実感できるもの、そしてその実感に至る過程を明らかにすることにより、より良い保育実習事前・事後指導への手がかりを見出す。

2. 研究の方法

2. 1 「実習振り返りシート」をもとに学生が実感できる学びについて整理する

◇対象学生：保育実習Ⅰ（保育所）の参加学生 41名

◇実習時期：平成 27 年 9 月～10 月

長谷〔7〕は、保育実習Ⅱを終えた学生の振り返りシートをもとに、学生自身が認識した課題を明らかにしており、この研究では学生の記述をカテゴリー化し整理分析している。本研究の方法としても、実習事後指導において記入した「実習振り返りシート」の記述を整理分析することで、学びを明らかにしていく。その際、実習事前指導に使用した『保育実習の手引き〕〔8〕にある「保育実習の主要な目標と課題」の7つの項目に分けて、整理することとした。これを用いて実習事前指導をおこなったため、この項目に分けて学びを整理することで、事前指導の不十分な点が見出しやすいのではないかと考えたためである。

「実習振り返りシート」には、実習中に「ご指導いただいたことや学んだこと」を整理する項目として、「1 実習日誌」「2 指導案・部分保育・研究保育」「1・2の項目以外」という大きく3つの項目を設けた。ここでは最も自由度の高い記述項目である「1・2の項目以外」の記述に着目する。記述内容に細かな指定がないため、学生が学びとして実感できている学びが記されると予測した。

2. 2 実習日誌から学びの実感に至る過程を考察する

2. 1の調査結果をもとに、実感できている学びに関する記述のある実習日誌を抽出する。それらの実習日誌の記述から、学生の体験や感情の変化をとらえ、学びを実感するために必要な過程を明らかにする。

3 結果と考察

3. 1 学生の学びの意識を整理する

『保育実習の手引き〕〔8〕の「保育実習の主要な目標と課題」の項目に沿って、「実習振り返りシート」の記述を整理する。

◇「実習振り返りシート」の調査結果

項目別の記述数（総合計41） ※複数記述あり

	項目	学生の記述をもとにした小項目
1	乳幼児の理解 (5)	○子どもの発達・特徴 (1) ○配慮を必要とする子どもへの保育 (3) ○発達に合った援助 (1)
2	保育所の理解 (0)	
3	保育者の役割の理解 (14)	○保育者同士の連携 (1) ○保育者としての立ち位置、向き、座り方等 (7) ○子どもの様子・全体を見る意識 (注意すべきポイント、素早い対応) (7) ○急な事態への対処 (1)
4	保育技術の修得 (36)	○子どもへの言葉かけ (16) ○子ども同士のトラブルへの対応 (12) ○生活場面での具体的な保育技術 (食事・午睡・排泄・おむつ交換

		等) (7) ○遊び場面での具体的な保育技術(遊びを広げる工夫、遊びを通して発達を促す、一緒に楽しむ) (3) ○意図を持って子どもとかかわり観察する (1) ○部分保育など主となって活動を進める際の技術 (1) ○日誌の記入について (1)
5	家庭・地域社会との連携 (0)	
6	自己課題の明確化 (1)	○ピアノ (1)
7	自己の内面を見直す (7)	○実習生としての態度(元気さ・積極性・挨拶等) (7)

「保育技術の修得」は36名(85.7%)の記述があり、多くの学生が学びとして実感できていることがわかった。特に「子どもへの言葉かけ」は16名(39.0%)、「子ども同士のトラブルへの対応」は12名(29.3%)の記述があった。この2つの項目の記述が多く、自ら実感できる学びであることが明らかとなった。実感できにくい学びは、「保育所の理解」「家庭・地域との連携」であることがわかった。

3. 2 実習日誌から学びを意識する要因を考察する

「子どもへの言葉かけ」「子ども同士のトラブルへの対応」についての記述がある学生の実習日誌から、これらを学びと実感するに至った過程を探る。

実習日誌の「実習の反省・評価」「個人観察記録」の項目から、「子どもへの言葉かけ」と「子ども同士のトラブルへの対応」に関する記述を抽出し、その際の学生の体験や感情の変化の過程を考察する。以下、抽出した3名の学生について考察する。

考察1：学生A(配属：1・2歳児クラス)

◎実習振り返りシートの記述

声かけについて。子ども同士の喧嘩の仲裁に入る時に最初から「順番に使おうね」など保育者の思いを子どもに言うのではなく、まずは子どもたちの気持ちを受けとめることが大切。子どもの気持ちを受けとめ寄り添い、声かけすること。声かけは難しいので常に学ぶことが大切。マンネリ化させない。

「子どもへの言葉かけ」「子ども同士のトラブルへの対応」の両方の記述がある。

◎実習日誌より

実習初日：「実習の反省・評価」
実習初日ですごく緊張したし、2歳児と深く関わった事がなく、最初はすごく戸惑いました。2歳児の事を事前に調べていたけど自分が考えていた事よりたくさんの事ができたり予想をはるかに超えていました。…子どもたちとも積極的にコミュニケーションをとりたくさんの事を学びたい。その為には名前を覚えて声かけできるようにしないといけないと感じた。

実習2日目：「実習の反省・評価」
子どもの名前もある程度覚えることが出来て子どもの名前を呼びコミュニケーションをとることが出来るようになってきた。子どもが遊んでいる時にどうしても喧嘩になってしまう時が多々あり、両

方の話を聞いて和解できるように「順番こに使おうね」など声をかけるけど「嫌だ」と片方の子が言ったり、上手に和解できない場合があり、私は両方の意見を尊重してあげたいと思い「順番に使えないなら先生がもらうよ」などなんとか和解に持ち込んだけど、子どもは納得できているのかなと思いました。

実習5日目：「個人観察」

ホールでボールで遊んでいる時にDちゃんとEくんがぶつかってDちゃんが泣いてしまった。…Dちゃん、Eくん両方から話を聞き「DちゃんもEくんも痛かったね」と声をかけるとEくんが「ごめんね」と言った。「Eくんがごめんねって言ってるよ」とDちゃんに伝えるとDちゃんも「ごめんね」と言った。Eくんは痛かっただろうけど泣かなかった。

⇒Eくんは自分も痛くて泣きたいけどぶつかってしまったのは自分も悪いと思って先に謝ったと感じた。DちゃんもEくんが謝ってからEくんも痛かったことを理解し自分も悪かったと思い、謝ったと感じた。

実習初日には、子どもたちとの関わりに戸惑った様子がかえり、名前を知っていた方が話しかけやすいと考え、2日目には名前を呼んでコミュニケーションをとることに成功している。

トラブルの場面に立ち合った際、子どもたちの主張の間で困惑した様子が伝わってくる。“子どもは納得できているのかな”と自分のかかわりがよかったのかと半信半疑で、納得ができなかったという思いが読み取れる。しかし5日目には、お互いの思いを受けとめ、代弁することを実践し、子どもたちから「ごめんね」とその場に合った言葉を引き出すことに成功している。

実習6日目：「個人観察」

昼食をとる時やおやつの際に「自分で食べれるよ」と言って上手に食べていて「すごいね」と言う嬉しそうな顔をした。また、あまり食べるのが進んでいない時に「お皿ぴかぴかにできるかな」と声をかけると「できるよ」と言ってもりもり食べていた。また、パズルをしている時や園庭で遊んでいる時も同様に「〇〇できるよ」と言ってやっていた。

⇒自分で食べれることをすごいとほめたり認めてほしいんだと感じたし、ほめる事でもっとできることを認めてほしいんだなと感じた。

実習7日目：「実習の反省・評価」

…甘えてくる子に対して、私の気持ちとしては「頼ってくれてうれしい」という気持ちが大きく手伝うばかりしてしまうが、自分でできる事は「できるよ」と言ってなるべく「自分でする」というようにした方がよいと感じました。

実習7日目：「個人観察」

着替えをする時に「出来ん」と言って私の方に服を渡してくる。最初は「Hちゃん、できるよ、よく見てごらん」と声をかけるが「出来ん」と言って再び服を渡してくる。手伝う時もあるが、服のむきを直して「よくみて着てごらん」と言って服を渡すと自分で服を着る。

⇒出来るのに出来ないと言って甘えているのかなと感じているが、ついつい手伝ってしまう。なるべく自分でできるように途中まで手伝うとか服の向きだけ直して渡すようにしないといけないなと感じた。

実習生としては、子どもから自分への発信はとても嬉しいものであり、それに答えたいと思うのは当然のことだろう。しかし子どもからの要求をそのまま受け入れ、自分が着脱のほとんどを手伝ってしま

うことは保育者として良い援助なのか、と考え、葛藤していることがうかがえる。“頼られて嬉しい”感情を持ちながらも、保育者としてあるべき姿を考え、迷っていることがわかる。“手伝ってしまう”との記述より、できることは自分でしてほしい、そのようにかかわりを持つのが望ましいと考えており、手伝うことを最小限にしようと工夫して言葉をかけていることが感じ取れる。そして、言葉かけや援助を工夫し、子どもが自分で服を着ることを促すかかわりに成功している。

考察2：学生B（配属：3歳児クラス）

◎実習振り返りシートの記述

実習生という特別な立場である私に、甘えを見せてくれる子どもたちに対して、人に甘えるということを受けとめながら「これは自分でできる？」「自分でできるのみたいだね」と少しずつ声かけをしていくことを指導された。子どもたちが「自分でできるよ！」と見せてくれるように変わっていった。

「子どもへの言葉かけ」についての記述がある。

◎実習日誌より

実習6日目：「実習の反省・評価」

朝、「先生これやって…できない」と言って手伝ってもらおうと声をかけてきていたSちゃんに「自分でできるの知ってるよ～」と言いつつ手伝ってあげたところ、お昼からはシャツを入れることを「自分でできるからね！」とSちゃんの方から言ってくれました。

実習を終えて：「総合考察」

先生方は、子どもが自分でできるよう促していることを感じたので、「やって～」と甘えてくる子どもにどう関わればいいのか迷いました。そこで先生から“子どもの気持ちを受けとめつつ、少しずつ自分でできるような言葉かけを心がける”という助言をいただきました。それから少し手伝いながら「後ろのシャツは先生が入れるから、前は自分でできる？」や「先生、自分でできるの知ってるよ。」と言葉かけをするようにしたところ、甘えてきていた子どもたちが「先生、これね、自分でできるからね！」と自ら言ってきたり「できる？」と聞くと「うん。」と返答してくれるように変わりました。言葉かけ一つでも子どもを理解し、成長を促すことに繋がるのが分かり、とても嬉しかったです。

自分に甘えてきてくれる子どもたちに戸惑った様子が感じとれる。子どもたちが自分でできること、先生方もそれを促していることを実感していたため、自分の対応に迷いを感じたのだろう。保育者から助言をいただき、かかわり・言葉かけを工夫し、子どもたちの意欲的な姿を見ることができている。自分の言葉かけ一つで子どもが意欲的になるという成功体験を得ている。

考察3：学生C（配属：3歳児クラス）

◎実習振り返りシートの記述

子どもたちがけんかした時、先生は2人の子どもを呼び、一人ずつに「どうしたの？」と気持ちを聞き出し、お互いの気持ちを知らせ、「どうすれば楽しく遊べるかな？」と子どもたちに考えさせていました。保育者が「じゃんけんね。」や「〇〇ちゃんが使って終われば〇〇ちゃんね。」などと解決策を出し、それで終わりにしてしまうのは簡単ですが、自分たちで話し合い、どうするのかを決めるこ

とで、問題を自分で解決する力がつくとおっしゃっていました。

「子ども同士のトラブルへの対応」についての記述がある。

◎実習日誌より

実習初日：「実習の反省・評価」

1日の中で子どもがおもちゃの取り合いをする場面に多く出会いましたが、そこで「〇〇くんも使いたいんだって。後で貸してあげる？」などと声をかけても「やだ。」と終わらせてしまうことが多く、いろいろと言ってもダメな時に困ってしまいました。

実習10日目：「実習の反省・評価」

子どもがけんかした時に、声をかけたくなりますが、できるだけ子ども同士の話し合いにまかせて見守るようにしました。手や足が出た場合には、まかせておくわけにはいきませんが、自分たちで解決できるようになることはこれから友だち付き合いをする中でとても重要なことです。お互いにゆずらずに、解決できないこともあります。自分たちで「じゃあ〇〇くんが使ったら〇〇くんで、次〇〇くんね。」や「じゃんけんしよう。」などと、解決策を考えて行っている時もありました。先生が間に入ってルールを決めてしまえばすぐに終わることも、子どもたち自身で考えて、時間がかかってもどうにかしようということが大切だなと思いました。

実習初日に子ども同士のケンカに直面し、様々な言葉かけをしてはいるが、うまく子どもの心に届かず、戸惑ったことがうかがえる。実習の日々を重ねて、言葉をかけて解決しようとする方法だけでなく、子どもたちの会話のやりとりを見守るという方法にも気づけたようである。そのなかで、子どもたちが自ら解決策を考えることができた場面に立ち合うことができている。

4. おわりに

学生が実習を振り返った際に、自分に身についたと実感できる学びは、「子どもへの言葉かけ」と「子ども同士のトラブルへの対応」であることがわかった。今後は、このような実感できる学びをさらに深めて、子どもの発達や保育者の意図・願いの洞察にもつなげられるような実習事前・事後指導を実践していきたい。

逆に、「保育所の理解」「家庭・地域社会との連携」という項目は、学びとして実感されにくいことがわかった。「保育所の理解」については、およそ二週間をその場で過ごすことで知り得ることは多くあるだろうが、それが自分に身についた知識・技能であるとは実感できにくいことがわかった。「家庭・地域社会との連携」についても、保育者の保護者対応や地域行事に参加する等、体感してはいるものの、学びとは実感できにくいようである。実感できにくい項目については、実習事前・事後指導においてより詳細な説明が必要である。事前指導においては具体的な着眼点を伝え、事後指導においては学生の学びを引き出す（実感させる）ことのできるような振り返りシートを用いる等の方法が考えられる。

さらに、実感できている学びについて実習日誌の記述を読み取っていくと、経験したことには共通する過程があることが明らかとなった。

まず学生Aの記述にあったように、子どもと対峙し、戸惑いや緊張を感じる経験をする。そしてその経験から、子どもとのかかわりについて改善したいという気持ちを強く抱き、より良い言葉かけやかかわりの方法を獲得しようとする。そして、自分なりに工夫し、積極的なかかわりができるようになると

いう成功体験を得ている。

また子ども同士のトラブルに直面した時、子どもから甘えととれる反応を示された時にも、どう対応すべきか悩んだり葛藤したりしていることがわかった。そして、より良い言葉かけやかかわりの方法を獲得したいという気持ちを強く抱いている。そして保育者の対応をしっかりと見て学びとろうと意識したり保育者から助言を得たりしている。その結果、次に同じような場面に直面したときに、改善した方法を実践し、そこで成功体験を得ている。

つまり、学生自身が戸惑いや葛藤というネガティブな感情を一度抱き、それを改善するための具体的な方法を知りたいと強く意識し、そしてそれを実践し成功体験を得るという共通した経験があることがわかった。このような体験と感情の過程を経ることにより、自分に身についたという学びの実感につながるものが明らかとなった。このことから、実習中に戸惑いや葛藤というネガティブな感情を抱くことは、必ずしもマイナスな効果があるとは言えないということがわかる。実習中にネガティブ感情を持つことを恐れず、自分自身の未熟な点の気づきであると認識し、課題を焦点化する必要がある。実習日誌にも、ネガティブな感情を持った場面を書き、何に戸惑い、困ったのかを整理することで、自分自身の課題を明確にすることができる。今後はこれらのことを踏まえて、実習指導をおこなっていきたい。さらに、学生が戸惑いや葛藤というネガティブな感情から、成功体験というポジティブな感情へと変化した過程について、研究を進めていきたい。

引用文献

- [1] 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知 2013年「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」
- [2] 全国保育士養成協議会編 2007年 『保育実習指導のミニマムスタンダード—現場と養成校が協働して保育士を育てる—』 北大路書房
- [3] 三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』第46巻 第2号 1998年 p 203-211
- [4] 小藪江幸子「保育実習自己効力感尺度作成の試み」『淑徳短期大学研究紀要』第48号 2009年 p 23-135
- [5] 小藪江幸子「保育実習が学生の自己効力感に与える影響—実習回数の違いによる自己効力感の特徴—」『淑徳短期大学研究紀要』第53号 2014年 p 97-112
- [6] 山瀬範子「保育者としての専門性獲得プロセスとしての保育実習」日本教育学会第74回大会発表要旨集 2015年 p 348-349
- [7] 長谷秀揮「保育実習Ⅱにおける学生の学びについての一考察」『四条啜学園短期大学紀要』第47号 2014年 p 59-65
- [8] 高松大学・高松短期大学 2008年 『保育実習の手引き』

参考文献

- ・阿部和子・増田まゆみ・小櫃智子編 2014年『最新保育講座⑬保育実習【第2版】』 ミネルヴァ書房

追記

この論文は、日本保育学会第 69 回大会（2016 年）において「保育士を目指す学生の気づきと成長を考察する」として発表したものに加筆修正したものである。